

### ピカジップ PCAGIP

## ～注目される新しいスタイルのケース検討法～

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士） 金屋光彦

### 1 新しいケース検討の手法

多忙を極める学校現場で、新たな事例検討法が注目されています。PCAGIP（ピカジップ）と呼ばれるもので、私の勤務する都立高校で実施したところ、86.7%の先生方が「満足できた」と回答されました。

その具体的感想をみると、「ニュータイプの研修形式で革新的で良いと思います」、「意見をすべて書きとめて、情報を共有してフィードバックする形式はこれまでなかったので、とても新鮮でよい手法だと感じた」等、ラディカルで新鮮だった印象を持たれた記述が目立ちます。

「全員が参加したことはすばらしいことであるし、教員が問題を一人で抱えることなく、みんなで課題解決を図っていくことが大切であると認識した」

「生徒の問題行動と状況について、各先生との間で共通認識が持てた」

「それぞれの先生がどのように感じ考えていたのかが分かり、良かったし安心した」

「こういう機会情報を共有し、先生方が一つになることが大切だと思いました」

このように、情報の共有を通して、先生方のリレーション作り、一体感の醸成も、PCAGIPの目的の一つです。

さらに、「経験のある先生方から貴重な意見を交換できて有意義だった」という感想から、先生方が持つ資源、特に経験豊富な個人技に優れた生徒指導の手法を伝承する点でも、効果がみられました。

### 2 教員のメンタルヘルス向上に

このPCAGIPという新しい事例検討法には、先生方のストレスを軽減するという狙いもあります。最近精神疾患で休職される教師が急増し、身体疾患以外の病気で休職された教師の1.7倍にもなっていることは、前回お伝えしたところです。ストレスの多い教員生活の中で、職場風土をより信頼と安心が漂うものにし、ストレスを軽減を図るうえで、このPCAGIPが役に立つのです。

組織風土の違いで、働く人たちが受けるストレスは、大きく変わります。第一生命経済研究所が行った調査（20歳～59歳までの全国の会社員、有効回答763）によると、

職場のストレスが少ない職場は、「上司と部下との人間関係に温かみと信頼感があり、わきあいあいと活発で、チームワークがよい」となっている一方、ストレスの多い職場では、これらの要素が圧倒的に少なく、「上の立場の意見には異を唱えにくく、事を荒立てないことが最優先され、他人に無関心で交流も少ない」という特徴が指摘されています。

### 3 大きな破綻の未然防止にも

10年以上SCとしてさまざまな学校へ行く中で、私自身も思い当たる節があります。

保護者の学校信頼度が高く、不登校やいじめも少ない落ち着いている学校は、職員室の雰囲気は明るく活気があり、先生間の人間関係も良好で、協力連携もよく機能しています。たとえば2年生の生徒が暴れているとの緊急事態が起こると、職員室にいる先生方全員で現場へ直行し、対応に当たるのです。

ところが、問題の多い学校は、2年生担当の先生だけが現場へ行き、他の先生方は「また2年生かよ」等と、批判的な態度を示したりします。管理職と教員との意思疎通も滞りがちで、先生同士の連携や協力関係も乏しい様子が見えがえします。生徒児童の問題行動は、学校全体で取り組むという雰囲気が欠けると、先生方のストレスが高まるだけでなく、いじめ自殺等の私たちが最も恐れる悲劇を生むリスクも高まります。

2006年とその翌年に、東京都の新任教師が相次いで自ら命を絶つという痛ましい事件がありました。自殺には必ず深刻な孤立感があります。これらの新任教師は周囲の支援が得にくい環境に置かれ、ほぼ孤立無援の状態だったことがうかがえます。

学校で起こる事態は、学校スタッフ全員の問題ととらえて対処する。その中から培われる一体感や連帯感は、教師ばかりでなく生徒児童にとってもとても大切です。子どもたちは師範でありモデルである先生の姿をみて、育っていくからです。このPCAGIPスタイルによるケース検討会は、この大切な雰囲気を培うのにとても役に立つのです。この有益なPCAGIPの具体的な内容は、次回お話しします。

<つづく>